

豊島区立雑司が谷旧宣教師館

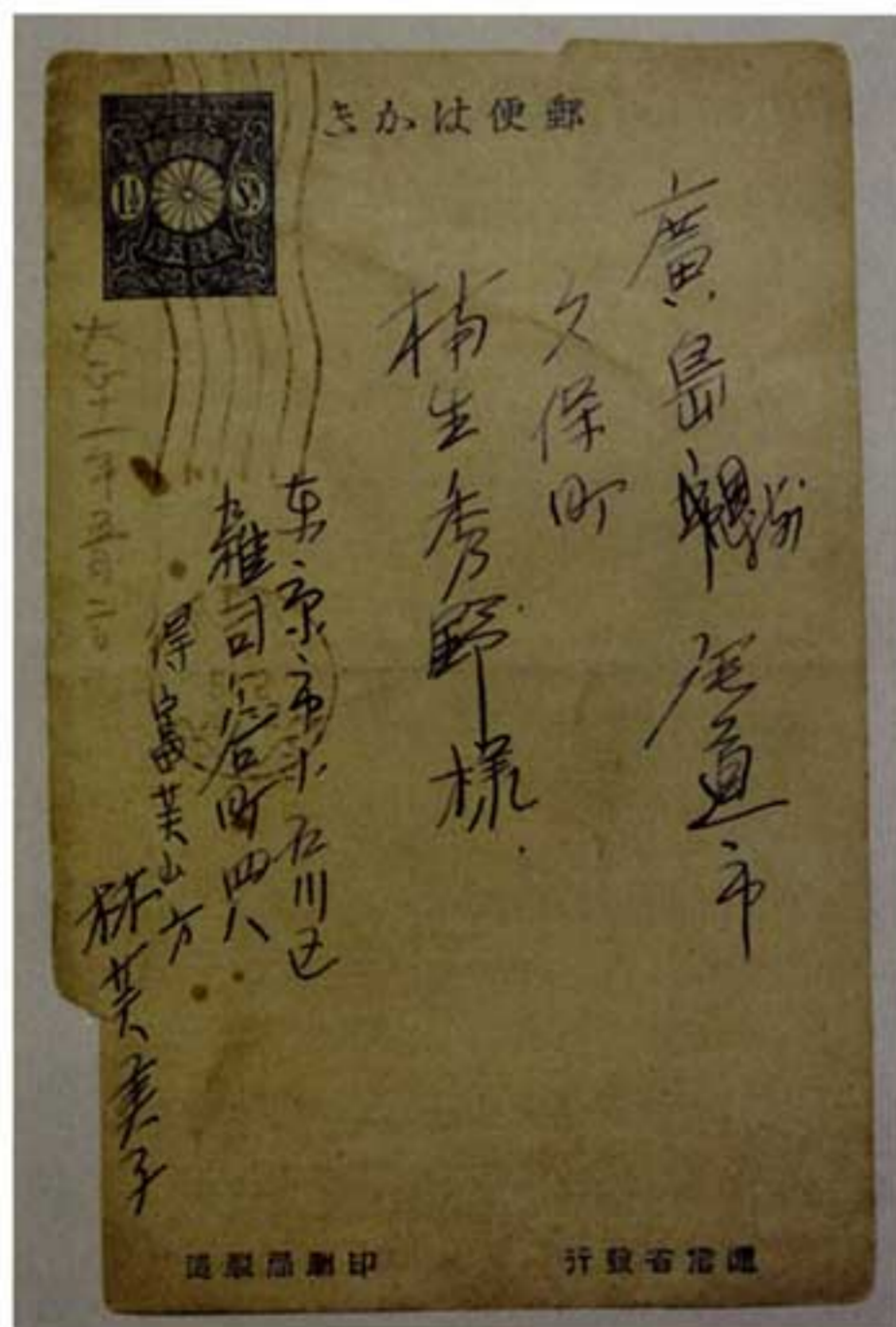
〒171-0032 東京都豊島区雑司が谷 1-25-5 Tel/Fax 03-3985-4081

もくじ

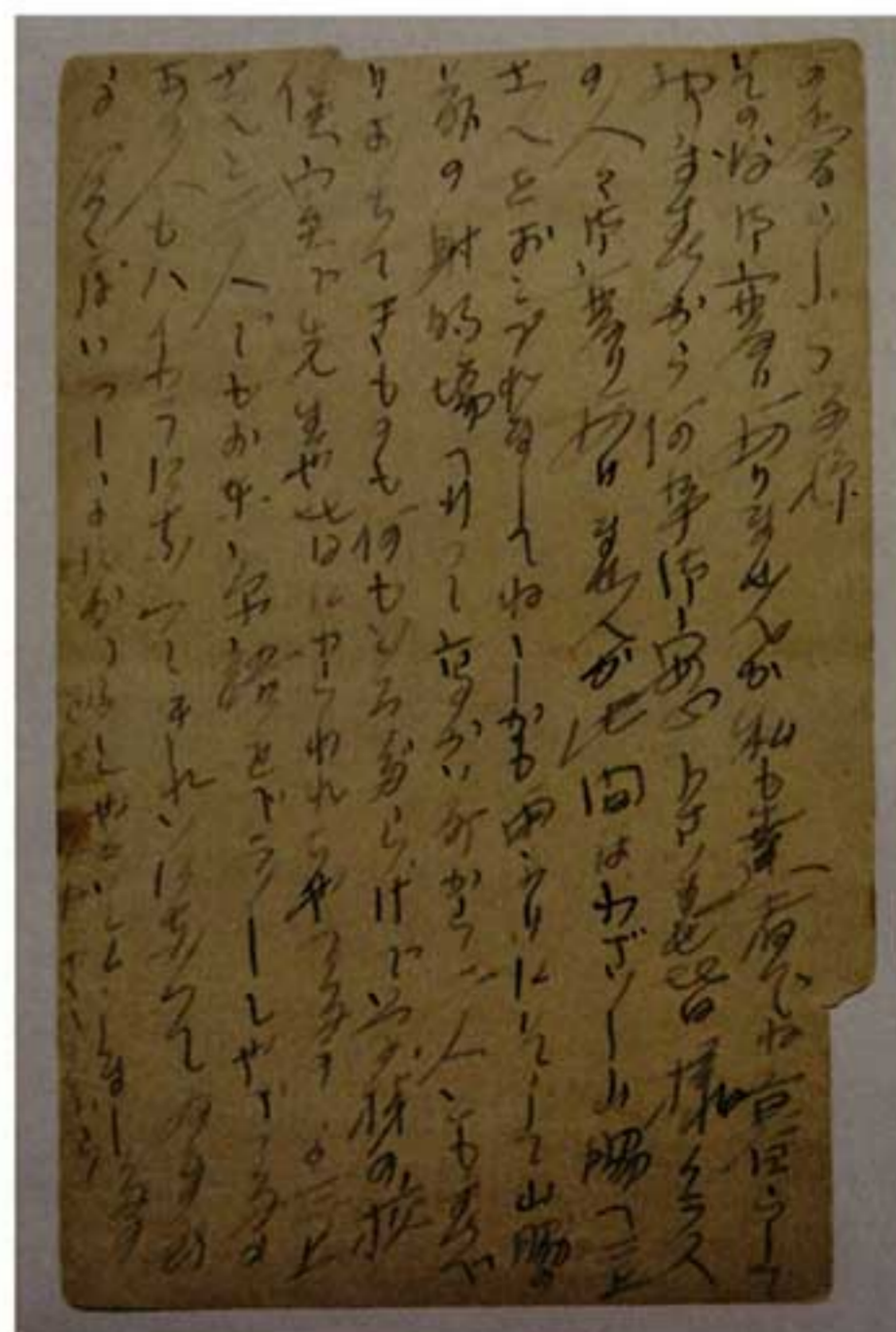
- ◆ 林芙美子と雑司ヶ谷 ——東京生活の第一歩—— ……1~4ページ
- ◆ 雑司が谷旧宣教師館わくわくワークシート・まちがいさがし …… 5ページ
- ◆ ものづくり工房のないしょばなし …… 6ページ

林芙美子と雑司ヶ谷 ——東京生活の第一歩——

「海が見えた。海が見える。五年振りを見る、尾道の海はなつかしい。」^① 有名なこの書き出しで、恋人を追って故郷の尾道に戻り、そして再び東京に舞い戻った顛末を『放浪記』に著した林芙美子。幼少期から親の行商に付き添い、アウトロー的な放浪生活が一生付いて回った。同郷の青年との失恋に至った尾道への旅路は本来なら、芙美子が尾道高等女学校を卒業した直後、1922（大正11）年4月に恋人を追って19歳で上京したところから始まっており、さらに東京生活第一歩の地が雑司ヶ谷^②であったのだが、度々加筆修正が加えられ、時系列が入り乱れた現行の『放浪記（岩波版）』からは判りづらくなっている。



(図1) 林芙美子からのハガキ・表
尾道市立中央図書館蔵



(図2) 林芙美子からのハガキ・裏
尾道市立中央図書館蔵

表紙で掲載した葉書の写真・図1、2は、林芙美子が東京から尾道の友人に宛てて書いた近況報告である。消印に5月2日とあり、芙美子が上京して一ヵ月ほどしての便りである。友人と一緒に東京語を話している様子を若い女性の澁刺とした快活さで語っており、既に東京の生活に馴染んだと言わんばかりである。葉書の表面を見ると、返信先の住所として「東京市小石川区雑司ヶ谷四八」と書かれている。ここに芙美子が住んでいたと考えるのが自然であろう。現在のどこなのであろうか？そこには林芙美子が暮らしていた頃の名残りが残っているだろうか？

現在の住居表示制度の「雑司が谷」は、鬼子母神周辺、雑司ヶ谷霊園の南側から不忍通りに至る手前までを示すが、歴史的には範囲が何度も変化している。江戸時代の記録として「武蔵国豊島郡雑司谷村絵図」（豊島区教育委員会発行『豊島区地域地図 第五集』）を見ると、西は池袋駅西口側の現在は史跡公園になっているかつての弦巻川の源流・丸池まで伸びていた。北は巣鴨町に隣接し、東から南は護国寺を含め不忍通りが目白通りに達する範囲を指した。現在は文京区目白台や豊島区目白の北側にあたる土地も雑司が谷（当時の名称は雑司ヶ谷、あるいは雑司谷）の範囲であった。それが明治に入ると、護国寺や不忍通り近辺は小石川区雑司ヶ谷町（現在の文京区西部）に分けられ、残りは高田村大字雑司ヶ谷になった。この後も地区の再編は度々行われ、特に1966（昭和41）年の住居表示施行に伴い、現行の豊島区雑司が谷一～三丁目に縮小され、名称もひらがなを使った「雑司が谷」に統一された。葉書の住所から、林芙美子が住んだ雑司ヶ谷は、小石川区の方の雑司ヶ谷町内であったのがわかる。

『放浪記』と同一路線の自伝風日記で、1940（昭和15）年出版の『一人の生涯』では、東京に上京し、雑司ヶ谷に住むことになった様子が、より明確に書かれている。少し長いが、引用する。

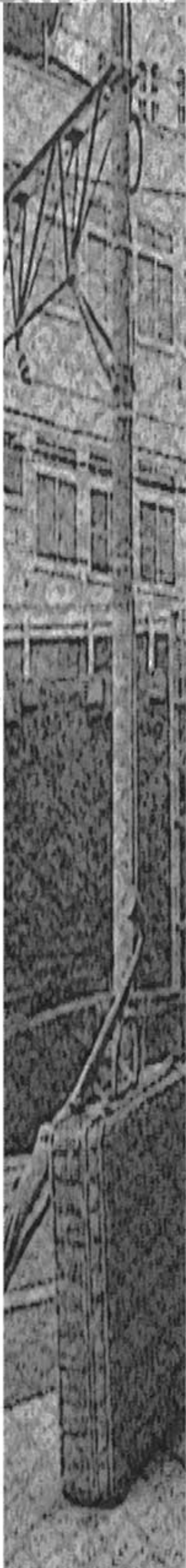
「さて、東京へ着いてみますと、私の空想以上に、東京は賑やかな大都會でした。私は賑やかな街路を走つてみる赤い市内電車に驚いたものです。

宮城の神々しく美しいこと、濠をめぐらした古い石垣、丸の内の、それぞれに大きい建物、東京驛の赤煉瓦の堂々としてある、私はまるで外國へ行ったような気がしました。

友人達も、この景色にはしばらく呆れておたやうです。澤山の、レールを持った廣い驛、田舎では四五臺しかなかった人力車が、驛の前の廣場にずらりと澤山並んであるのです。女達は、裾へひくような、レースの長いショールをしておました。東京へ着くまでは、あんなに團結した気持ちで希望を語りあっておた友人達ですのに、知人や肉親の迎への人達に出逢ふと、みなそれぞれに、孤立した利己主義にかへつてしまひ、私は東京驛で、これらの友人に別れて、たつたひとりになつてしまひました。」^(註3)

地方都市としては賑わっていた尾道ではあるが、東京との差は大きく、衝撃・戸惑い・これからの生活への不安、それでも消えない憧れの地・東京に来た気負いが瑞々しく伝わる。芙美子が見た東京驛周囲の風景はどんなものであったのか。昨年12月に開業100周年を迎えた東京驛であるが、1914（大正3）年に出来た当初、東京驛の正面・皇居側は「三菱ヶ原」と呼ばれる野原が続いていた。1890年に三菱財閥の二代目・岩崎弥之助に払い下げられた丸の内の土地は、1900年には三菱一号館、二号館などが建設されてゆき、一丁倫敦と呼ばれた街並みが整いつつあった。反面、東京驛正面は手付かずだったのである。芙美子が東京驛に着いた大正11年には、正面の丸ノ内ビルヂングが翌年に完成を控え建設中であり、欧米風の美しい中層ビル群の様相を整えつつあったのを芙美子は目にしたはずである。この後、母親の同郷で尺八の先生をしている知人を頼るために雑司ヶ谷に向かう。

「～(略)～ 電車から降りると、ひろい坂を下つて、つゞきの咲きかけている護國寺と云ふ大きな寺の前を通り、水車小舎のある雑司ヶ谷の墓地の方へ歩いて参りました。小川があつて、



水車小舎があつて、素人下宿でもしてみよう、障子のすがすがしい二階家が黄昏近い薄陽にしづもつておました。魚屋の前を通ると、生きの悪い魚が、苔のぬるぬるした板の上へ並べてあつたりもしました。木村屋のパンと書いてあるハイカラなパン屋さんだの、果物屋の美しさは、夢に見たインドの景色のやうだと思ひました。雑司ヶ谷の、その尺八の先生近邊は、たいへん淋しいところで、盲啞學校や、女子大學が近所にあるのださうです。」^(註4)



(図3) 人文社の『明治四十年 東京市十五區番地界入地圖 東京郵便局』にある「東京小石川区全図」の部分。護国寺周辺と小石川区側の雑司ヶ谷。補足は本論筆者による。

葉書の住所を地図で確認したのが、図3の丸で囲った部分である。明治40年の地図であるが、大正10年の同域の地図（豊島区教育委員会発行『豊島区地域地図 第四集』）と比較しても、番地の区割りには変化がほとんどない。この番地に相当すると思われる所の現在の様子を調査した写真が右の図4である。残念ながら、戦後の不忍通りの道路拡張や高速道路の建設で、車の通りが激しい、都会でよく見る風景に変わってしまっていた。当時の面影と言えるものは、微かに道路の形に残っているのみである。



(図4) 芙美子が住んだ「小石川区雑司ヶ谷」の現在の様子。目の前の大きい道は拡張された不忍通り。写真中央の細い道で三叉路になっている先に、寄宿先の先生宅があった場所と思われる。

『一人の生涯』に戻る。文中に「女子大學」とあるが、お茶の水女子大学が現在の文京区大塚に移ってきたのは1949（昭和7）年であるから、日本女子大学のことであろう。経済的に恵まれていない家庭事情から、芙美子が望むべくもない大学生活を謳歌する同年代の少女達への気持ちが、湿っぽくなり過ぎない程度につづられているが^(註5)、実際の心中はいかようなものだったろう。

ところで芙美子は東京駅から雑司ヶ谷へ来て電車を降りたとある。どのようなルートで来たのだろうか？日本鉄道（後に国有化、現・JR東日本管轄線）の池袋駅は明治36年に開業しているが、まだ環状運転は始めていない。現在の都電荒川線の一部は、1911年（明治44年）に王子電気軌道として飛鳥山上（現・飛鳥山）～大塚間で開業している。しかし、より雑司ヶ谷に最寄りの兒子母神前停留場や水久保停留場（現・東池袋四丁目）が開業したのは、関東大震災以後である。庶民の足として発達した市電であれば、1921（大正10）年12月に開業した護国寺線の大塚町停留場が、護国寺の東側にできている。市電を乗り継いで雑司ヶ谷まで来たのだろうか。だとすれば不忍通りの富士見坂を下って護国寺の前を通り、寄宿先の先生宅に向かったことになり、坂を下って護国寺前を通ったとする芙美子の記述と符合する。その後、水車小舎のある雑司ヶ谷の墓地の方へ歩いたとある。今回の調査では、当時どこに水車小屋があったのかまではわからなかったが、あったとすれば弦巻川のほとりであろう。

JR尾道駅近くの商店街に

まだ暗渠化していない弦巻川は、丸池を起点に法明寺と鬼子母神の間を流れ、雑司ヶ谷霊園付近をかすめて南下し、その後ほぼ不忍通りに沿って護国寺方面に流れて行った。解釈によっては、護国寺からほぼ真直ぐ西に下れば寄宿先に至る道を、霊園方向に奇妙に北上してからまた戻る説明と受け取れなくもない。

『放浪記』に代表されるように、日記の体裁をとり自伝風であるのが魅力の一つである林芙美子作品であるが、事実だけを書いているわけではなく、脚色が差し挟まれていると言われる^{②⑥}。文学的格調を高めるため、あるいは何か煙に巻くように。この雑司ヶ谷到着の描写にも、多少の脚色が入っているのかもしれない^{②⑦}。定説では、林芙美子は雑司ヶ谷で尾道からの恋人と暮らしたとされているが、一説には暮らしていないとも言われている。少なくとも『一人の生涯』から伺える東京に来た直後の生活は、母親の知人宅に身を寄せた一人暮らしであったと読み取れる。同作品ではその後、父親が行商に出たために母親だけが上京して合流した場面へと続いており、尾道からの恋人の存在は触れられないまま過ぎる。実話のような作品から伺える実像は、ふわふわと捉えどころがない。そこが林芙美子作品の魅力の根源であり、事実には囚われない作品世界を構築する文学創作の本質だと言える。

林芙美子が雑司ヶ谷に到着する前、1914（大正3）年に雑司ヶ谷霊園が舞台として登場する夏目漱石の『こゝろ』は発表されていたし、その2年後には夏目漱石自身も鬼籍に入り、雑司ヶ谷霊園に眠った。ちょうど当館2階に展示してある雑司ヶ谷の再現模型の頃にそんな霊園近辺に住んだ、自意識の強い林芙美子は、豊島区外の「雑司ヶ谷」に住んでいたとは言え「雑司ヶ谷文化圏」の空気を吸った文化人に数えられる。

謝辞 本論を書くにあたり、葉書の掲載をご承諾くださいました尾道市立中央図書館と撮影の便宜をお図りくださいました司書・力石智様、その他調査にあたり問い合わせにご回答くださいました新宿区立新宿歴史博物館、その他の皆様に厚く御礼申し上げます。

（白田詠子 生涯学習指導員・学芸分野）

【注釈】

注1 岩波版『放浪記』p.256

注2 雑司ヶ谷から雑司が谷に統一される以前の名残りは、例えば「雑司ヶ谷霊園」のように都営の施設名称に残っている。本論では、基本的に話題としている時代に合わせて名称を使い分けた。

注3 『一人の生涯』pp.71～72、旧字体原文ママ

注4 『一人の生涯』p.72、旧字体原文ママ

注5 『一人の生涯』p.75、p.79

注6 林芙美子作品の虚構性については、『いま輝く 林芙美子』p27、『新潮日本の文学アルバム 林芙美子』p37でも指摘されている。

注7 『一人の生涯』あとがきで「自傳的スタイルではあるけれど、私のいままでの生活から数々のヒントをとらへて、深い波のまにまに、おもひきり抒清の海に溺れて書いた作品である。」と本人が述べているのも、脚色を暗に示しているともとれる。

【参考文献】

- ・林芙美子『一人の生涯』株式会社創元社、1940年初版
- ・林芙美子『放浪記』株式会社岩波書店、2014年初版
- ・『身長日本文学アルバム 34 林芙美子』株式会社新潮社、1994年5刷
- ・吉原暁編『尾道市立図書館 創立八十周年記念 尾道の林芙美子 今ひとつの視点』尾道市立図書館、1994年
- ・公益財団法人神奈川文学振興会編『没後六〇年記念展 いま輝く林芙美子』県立神奈川近代文学館、2011年
- ・豊島区立郷土資料館編『2005年度第2回企画展 ぞうしがや ——鬼子母神門前とその周辺——』豊島区、2006年
- ・荒川区教育委員会、荒川区立荒川ふるさと文化館編『平成23年度 荒川ふるさと文化館 企画展 都電荒川線に乗って』荒川区教育委員会、荒川区立荒川ふるさと文化館、2011年
- ・富田章、他編『東京駅開業百年記念 東京駅一〇〇年の記憶』東京ステーションギャラリー、2014年
- ・『明治四十年 東京市十五區番地界入地圖 東京郵便局』人文社、1986年
- ・『豊島区地域地図 第四集 東京近傍1万分の1地形図〈改訂版〉』豊島区教育委員、2011年
- ・『豊島区地域地図 第五集 近世（村絵図1）編』豊島区教育委員会、1992年

雑司が谷旧宣教師館わくわくワークシート・まちがいさがし

年 月 日 なまえ

きゅうせんきょうしかん としまく いちばんふる き ようふう うち
旧宣教師館は豊島区で一番古い木でできた洋風のお家です。とてもステキなので、
たの し き きゃくさま こんかい えかき え か
スケッチを楽しみに来てくれるお客様がいます。今回も絵描きさんが絵を描いてくれました。
おや？ よっぽどあわてていたのか、まちがい18か所もあります。いくつみつけられるかな？

(このワークシートは本物をよく見るためのゲームなので、数にこだわらず楽しもう。見つけ終わったら、ぬりえもできるよ。)

作成：Shirota





ものづくり工房のないうしよばなし

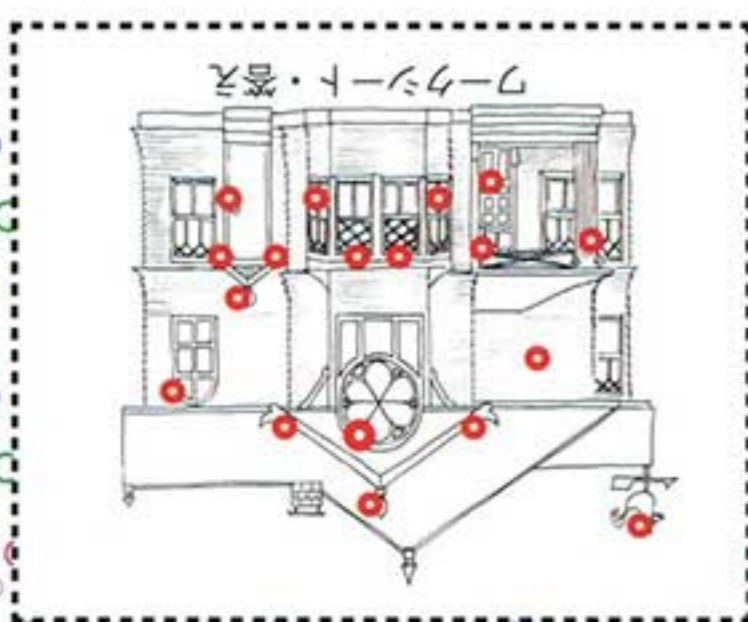
2014年度は5月から、小学生以下の親子を対象とした工作イベント「親子体験講座・ものづくり工房」を、毎月第一土曜日に開催しました。参加者の皆さんの発想に、毎回驚きの連続でした。全11回の講座をそれぞれ楽しく過ごして頂けたようなので、それで十分なのですが、どんな意図が込められていたのか、大人向けに種明かしします。

講座の運営目標は二つありました。まず、身近な歴史的建造物であるが故に当館を訪れる切っ掛けが掴めない方に、子供と楽しむ建築以外のアクティビティを提供することで来館して頂くということ。もう一つが、昔ながらのものづくり、つまり伝統的な工芸や産業、昔遊びにつながる材料遊びを通して、子供に自分で工夫する、自分で壊れたものを直す力を養ってもらう事でした。

子供時代を振り返ると、無駄としか思えない遊びに我を忘れて夢中になっていました。これらの遊びが意外なほどにバランス感覚や手先の器用さを養う基礎だったのだと私が実感したのは、大人になってけん玉を練習した時でした。普段使い忘れていた筋肉を使っているのが、よくわかりました。私は子供の時、木の枝の皮を剥いて繊維をほぐしたり、ティッシュで紙縊りこよを作って遊んだりしましたが、その全てが、昔の人のものづくりの感覚を理解したり、工芸家や芸術家が手を動かす機微や材料選択の理由を理解する助けになっていたのだと思います。講座の案内ポスターに「失敗しても気にしない。」と入れたのは、そのためです。完成させる達成感も大事なのですが、材料と親しむ事をまず経験してもらおう。そして、何か失敗しても自分で考え、解決の筋道を見つける時に使う引出しになるような体験をして欲しい。そう思いつつ毎回講座の内容を考えました。

難しかったのは歴史的建造物で行う工作イベントなので、「文化財を損なわない方法で行う」と言う制約が常にあったことです。事前に子供が扱って危険でない道具や材料を選ぶことは当然ですが、講座中も、子供達と同時に建物に配慮しながらの運営でした。「楽しい、思いっきりやりたい」気分が強くなった子供達にブレーキをかける必要もあり、水を差すようで残念に感じられることもありました。ですが、ほとんどの保護者の方が「旧宣教師館に子供と初めて来た。」とおっしゃり、イベント終了後に建物見学をした子供達の感想で、「このお家、大好き。面白い。」との言葉が聞こえてきたこと。また、何人かの保護者の方から「家では汚れるような工作を思いっきりさせられないので、良い機会になりました。」と言って頂けたことを、嬉しく思いました。この講座での経験が「種」となり、今後芽吹いて育ってゆくのを願っています。

(白田詠子 生涯学習指導員・学芸分野)



【2014年度「ものづくり工房」内容と参加人数】

- 5月3日 古着であみあみ、ペットボトル・ホルダー (3人)
- 6月7日 紙で作ろう、びよんびよん人形 (2人)
- 7月5日 ゆらゆら涼しげなかざり (4人)
- 8月2日 段ボール紙で動物おもちゃ (5人)
- 9月6日 巻いて巻いてビル建てよう (3人)
- 10月4日 紙ぜんまいで動くおもちゃ (4人)
- 11月1日 紙ぜんまいで動くおもちゃII (0人)
- 12月6日 水引きで作るクリスマス飾り (3人)
- 1月10日 葉や木の実でアートな節分用鬼のお面 (5人)
- 2月1日 手作り紙粘土で人形づくり (9人)
- 3月1日 紙羽で飛ぶジャンピングロケット (8人)